

中 挾 遺 跡

— 塩尻インター給油所用地の
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2 0 0 0

長野県塩尻市教育委員会

例 言

1. 本書は塩尻インター給油所建設工事に伴う中挾遺跡（長野県塩尻市大字棧敷所在）の発掘調査報告書である。
2. 現場での発掘調査は、平成10年11月25日から平成10年12月19日まで実施した。また、遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、平成11年4月から平成12年3月まで行った。
3. 本書の作成にあたり、作業の分担は次のとおりである。

遺物洗浄：大和 廣

遺物註記：市川きぬえ

遺物復元：一ノ瀬文

拓 本：塩原真樹

遺物実測：小松 学、野村悦子、山本紀之

遺構整理：小松 学、塩原真樹

トレース：小松 学、塩原真樹、野村悦子、山本紀之

写 真：小松 学

航空写真：㈱ジャステック

編 集：小松 学

4. 本書の執筆はIV-3を遺物とVを野村一寿が、それ以外を小松が分担して行った。
5. 本調査の出土品、諸記録は平出博物館に保管している。なお、今回の調査の出土品に註記した遺跡番号は「82」である。

凡 例

1. 遺構の番号は、過去の調査に引き続いて付けてある。
2. 遺構の縮尺は、1/60を基準とし、これ以外のもも含め挿図中に縮尺を明示している。
3. 遺物は、土器実測図1/40を基準とし、これ以外のもも含め、挿図中にその縮尺を明示している。
4. 古代の土器分類は、『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』4-松本市その1総論編一に基づいておこなった。

I 調査状況

1. 発掘調査に至る経過

文書記録

- 平成10年10月16日 塩尻インター給油所新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査委託について（依頼）
10月16日 塩尻インター給油所新築工事に伴う棧敷地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査について、株式会社中部宇佐美と委託契約を締結
12月11日 埋蔵文化財発掘調査の報告について
平成11年1月14日 中挾遺跡発掘調査終了について（通知）
1月14日 中挾遺跡埋蔵文化財発見届・保管証（届）
2月9日 中挾遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）

発掘調査実施計画書（一部のみ掲載）

1. 発掘調査地／塩尻市大字棧敷
2. 遺跡名／中挾遺跡
3. 遺跡の状況／地目（畑）
4. 発掘調査の目的及び概要／塩尻インター給油所建設工事に先立ち、1,000㎡以上を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘調査は平成10年11月30日までに終了する。
完了届は平成11年3月25日までに提出するものとする。
5. 調査の作業日数／発掘作業20日・整理作業40日・合計60日
平成10年度／発掘作業20日・整理作業0日・合計20日
平成11年度／発掘作業0日・整理作業40日・合計40日
6. 調査に要する費用／2,400,000円
平成10年度／1,620,000円
平成11年度／780,000円
7. 調査報告書作成部数／300部
8. 発掘調査の主体者及び委託先／塩尻市教育委員会

2. 調査体制

調査団長	平出友伯	（塩尻市教育長）	
調査担当者	小松 学	（日本考古学協会員・塩尻市教育委員会）	
調査員	小林康男	（日本考古学協会員・塩尻市教育委員会）	
	小口達志	（日本考古学協会員・塩尻市教育委員会）	平成10年度
	塩原真樹	（長野県考古学会員・塩尻市教育委員会）	平成11年度

発掘・整理参加者 市川きぬえ、一ノ瀬 悟、一ノ瀬 文、内川 初雄、大和 廣、小沢甲子郎
 草間三雄、小泉 忠行、小林 節子、小松 茂夫、小松 千元、小松 幸美
 武居サト子、武居 昇、武居 光子、千野よね子、中沢 久男、中沢ふさえ
 野村 悦子、野村 一寿、古畑 昭夫、古畑富喜子、丸山 久美 百瀬 茂
 百瀬登志信、山口 伸司、山本 紀之、吉江 要一

事務局	塩尻市教育委員会・生涯学習部長	小野克夫	(平成10年度)
	塩尻市教育委員会・生涯学習部長	飯田正弘	(平成11年度)
	塩尻市教育委員会・社会教育課長	武居和雄	
	塩尻市教育委員会・平出博物館長	小林康男	
	塩尻市教育委員会・平出博物館学芸員	小口達志	(平成10年度)
	塩尻市教育委員会・平出博物館学芸員	小松 学	
	塩尻市教育委員会・平出博物館学芸員	塩原真樹	(平成11年度)

3. 調査の経過

平成10年11月25日 作業員による遺構検出作業を開始する。
 12月19日 現場での調査が一応終了したため器材を撤収する。
 12月22日 ラジコンヘリによる空中写真撮影を行なう。
 12月26日 遺構平面図、遺構写真撮影等現場における作業を終了する。

整理作業および発掘調査報告書の作成は、平成11年4月から平成12年3月まで平出博物館において実施された。

4. 遺跡の状況と面積

第1表 発掘調査の状況と面積

遺跡名	場 所	現 況	種 類	全体面積	事業対象面積	調査面積	調査経費
中 挾	塩尻市大字棧敷	畑地	集落址	120,000㎡	2,000㎡	1,590㎡	2,400,000円

Ⅱ 遺跡の立地と歴史的環境

1. 地理的環境

中挾遺跡は、松本平東南の塩尻市大字棧敷地籍に所在している。遺跡は塩尻ICの500m西側の国道20号線沿いという、交通の要衝に位置しており、遺跡から東南に目を向けると塩尻峠があり、峠を越すと諏訪盆地へと至る。一方北に目を移すと松本平が大きく広がっているという、諏訪と松本との接点にあたる人やモノの往来が激しい場所である。

この中挾遺跡が位置する棧敷地区を含めた田川扇状地は、高ゴツチ山塊に展開する山麓斜面と田川により形成された扇状地形で、扇頂で900m、扇端で710mを測る。

今回発掘調査が行なわれた地点は、この田川扇状地と片丘丘陵との接点にあり、田川と鋳物師屋川により形成された小舌状台地に立地している。

2. 歴史的環境

中挾遺跡の周辺地域は近年の開発に伴い、旧石器時代から平安時代を中心とした数多くの遺跡が調査され多くの成果をあげている。ここではそれらのうちでも主要な遺跡を取り上げ発掘の成果について概観してみたい。(第1図)

【和手遺跡】

昭和62年度に国道20号線塩尻バイパス建設および市道改良工事に伴う調査が行なわれ、弥生時代の住居址3軒、方形周溝墓3基、古墳時代末から平安時代にかけての住居址32軒、掘立柱建物址3棟が検出された。

平成6年度にはカーパーク建設に伴い調査が行なわれ、ナイフ形石器を中心とした多数の旧石器が発見され、松本平最大級の旧石器時代の遺跡の存在が確認された。また、弥生時代の住居址11軒、方形周溝墓1基、古墳時代から平安時代の住居址53軒が検出された。

平成7年度のカインズホーム建設工事に伴う調査では、弥生時代の住居址19軒、古墳時代から平安時代の住居址106軒という大きな成果をあげている。

これらの調査により、和手遺跡は旧石器時代および弥生時代から平安時代にわたる大集落であったことが確認され、その出土遺物も平安時代のアイロンである火熨斗をはじめとして多種多様にわたり、この遺跡の重要性をよく示している。

【五日市場遺跡】

平成2年度に、棧敷長畝土地改良事業に関連して調査が行なわれ、弥生時代の住居址1軒、平安時代の住居址12軒、建物址4棟、中世の道路跡が確認されている。また、平成4年度には塩尻協立診療所建設工事に伴い発掘調査が行なわれ、平安時代の住居址13軒が検出されている。平成10年度の協立病院建設工事に伴う調査では、弥生時代の住居址1軒と方形周溝墓1基、円形周溝墓1基、平安時代の住居址

17軒が検出された。中挟遺跡とは小さな谷を隔てて対峙しており、遺跡の遺構や遺物の様相なども似通っており、両遺跡の強い関連性がうかがえる。

〔中島遺跡〕

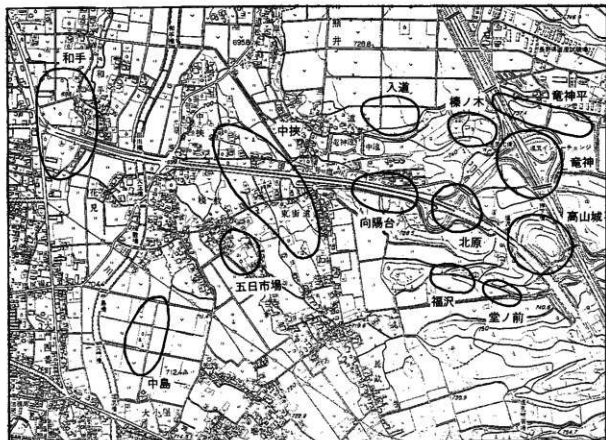
昭和50年度に、は場整備事業に関連して調査が行なわれた。縄文時代中期の住居址14軒、弥生時代後期住居址5軒、奈良時代の住居址1軒が検出されている。田川自然堤防上に立地する遺跡から縄文中期の遺構がこれほどまとまって検出されることは非常に稀で、特異である。

〔向陽台遺跡〕

昭和60・61年度に国道20号線バイパス工事に伴い調査が行なわれている。縄文時代早期住居址4軒、前期住居址4軒、弥生時代後期住居址6軒、方形周溝墓1基が検出された。とりわけ縄文時代早期の国内最大級の住居址を含む集落の発見は非常に大きな成果であった。

〔北原遺跡〕

昭和60年度に国道20号線バイパス工事に関連して調査が行なわれた。縄文時代前期住居址4軒、中期住居址3軒が検出された。検出された住居址は少ないが、縄文前期中葉および中期中葉の単純集落を確認できたということは集落構造を考える上で貴重である。



— 第1図 中挟遺跡周辺遺跡分布図 —

Ⅲ 調査の概要

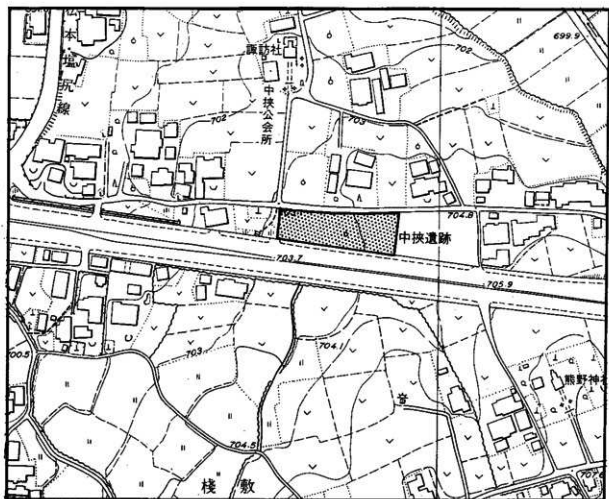
1. 調査の概要

塩尻市棧敷地区に所在する中挾遺跡（第2図）は、松本平の東南部、田川と鉤物師屋川により形成された小舌状台地上、標高704mに立地している。弥生時代から平安時代を中心とした遺跡で、西側には浅谷を挟んで同時期の遺跡が数多く検出された五日市場遺跡が対峙している。

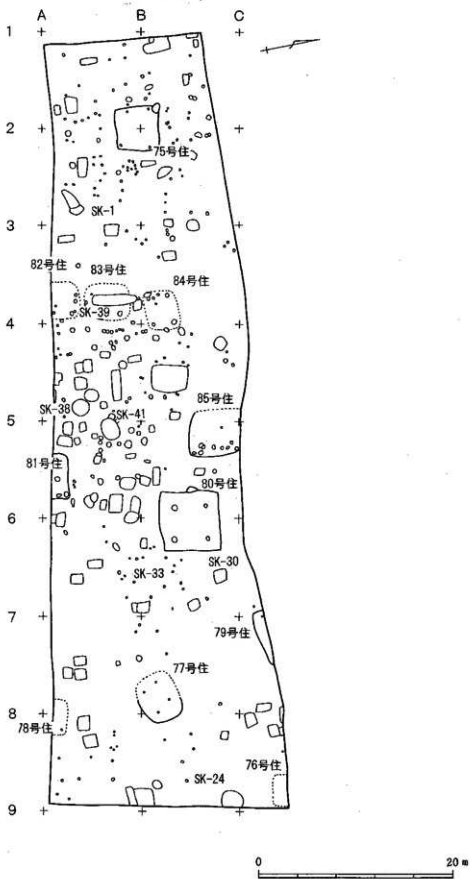
今回の発掘調査は、塩尻インター給油所建設工事に伴い行なわれ、弥生時代の住居址3軒、古墳時代の住居址1軒、平安時代の住居址7軒、その他古代・中世の土坑が検出された。

2. 調査の方法

調査に際しては、表土を重機により除去した後に手作業で遺構の検出を行い、検出後に遺構の掘り下げ等の調査を行った。調査では10mグリッドを採用し、南から北へA～C、西から東へ向かって1～9グリッドを設定した。



— 第2図 中挾遺跡位置図 —



— 第3図 中挟遺跡遺構全体図 —

IV 遺構と遺物

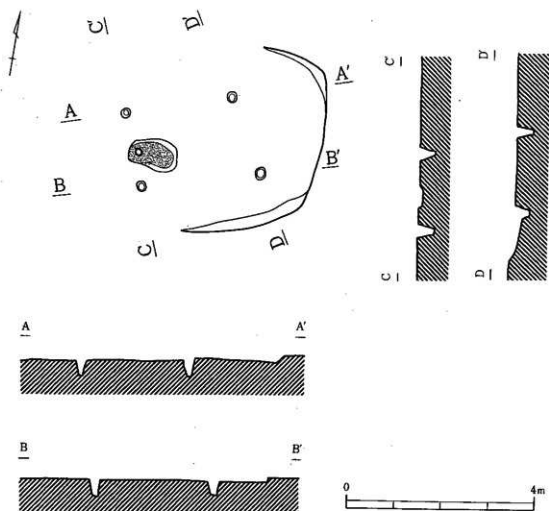
1. 弥生時代の遺構と遺物

中挾遺跡から検出された弥生時代の遺跡は、住居址3軒であった。しかし、遺構の残存状態は非常に悪く、遺物の出土量も少なかった。また、これまでの調査では方形周溝墓も検出されているが今回の調査では確認できなかった。

第77号住居跡

遺 構 (第4図)

A-7、B-7・8グリッドに位置する。住居址の東側の一部分が残存しているほかは、削平のため壁は確認できなかった。残存部から南北3.9mということは確認できたが、東西方向については不明であり、住居形態についても不明である。壁高は、南・北壁それぞれ15cmであった。床面はロームに掘り込まれており平坦であったが、締まりは弱かった。支柱穴は4本と考えられ、床面から35cm前後の深さがあった。炉は住居内に埋燗炉があり、周囲には焼土や炭化物が確認された。



— 第4図 第77号住居址 —

遺物 (第7図)

1は77号住居の炉体土器である。3本歯の工具により櫛描きの波状文が2条施文されている弥生土器の甕である。焼成は非常によく、内外面とも赤褐色の色調を呈している。胎土は砂粒と雲母を多く含んでいる。また、器面には横方向に調整痕がみられる。内部には炭化物が付着していた。時期：弥生時代後期。

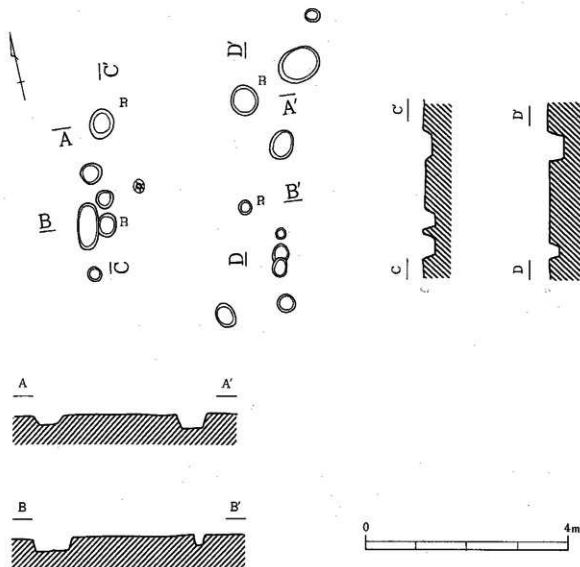
第84号住居址

遺構 (第5図)

B-3・4グリッドに位置している。住居址上面の削平が激しく、壁は確認できなかった。埋甕炉があり、その周囲には堅緻な床が僅かながら残されていたが、他の部分は平坦であるが締まりの弱い床であった。主柱穴はP1～P4であると考えられるが、住居形態については不明である。

遺物 (第7図)

2も埋甕炉に使用された炉体土器で、7本歯の工具により、波状文が描かれている。焼成は良好で、内外面とも黒褐色の色調であった。胎土は細かな砂粒が多量に含まれている。また、外面は埋甕炉に使用されていたため、二次焼成を受けている。時期：弥生時代後期。



— 第5図 第84号住居址 —

第85号住居址

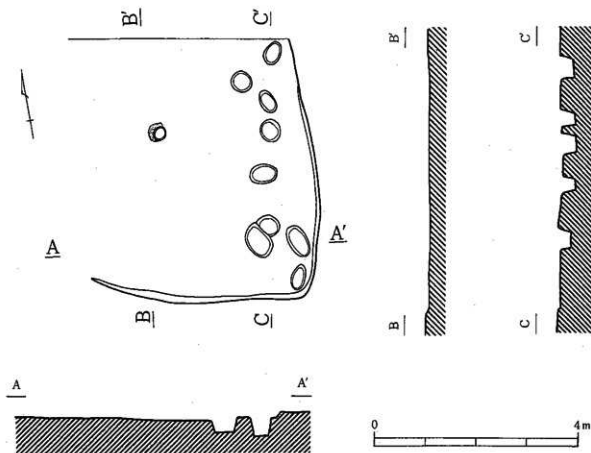
遺構 (第6図)

B-4・5グリッドに位置している。北側部が調査区外にあり完掘することができず、そのうえ住居南側も削平により遺構の一部が壊されていたために、住居形態は把握できなかった。残された床面はロームに掘り込まれた堅楸な床で、住居内には埋甕炉が残されていた。しかし埋甕炉の周囲にはわずかに焼土が残されているだけであった。壁高は東壁10cm、南壁15cmを測るが、北・西壁が確認できなかった。9本のピットが検出されたが、支柱穴の特定はできなかった。

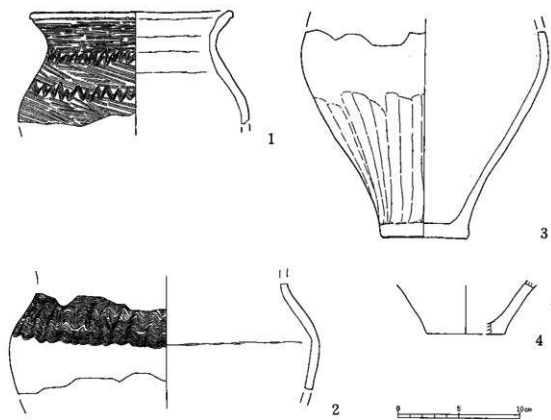
遺物 (第7図)

3・4ともに弥生土器の甕の低部および邸部から胴部にかけての破片である。両者とも無文で3の低部付近はヘラ削りによる丁寧な調整痕がみられる。胎土は細かい砂粒が大量に含まれていた。

時期：弥生時代。



— 第6図 第85号住居址 —



— 第7图 弥生土器 —

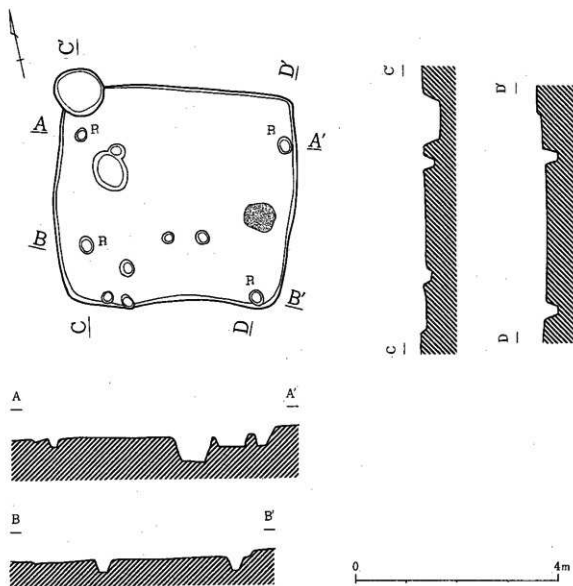
2. 古代の遺構と遺物

古墳時代の住居址1軒と平安時代の住居址が7軒検出された。これらのほとんどの住居址は攪乱を受けていたため遺構の残存状況も悪く、よって遺物の出土量も少ない。

第75号住居址

遺 構 (第8図)

A・B-1・2グリッドに位置している。東西4.7m、南北4.2mの方形プランを呈する住居である。東側中央部分に焼土の広がりが見られることから、この周囲にカマドがあったと考えられるが、袖石、粘土等は確認できなかった。壁高は、東壁15cm、西壁5cm、南壁10cm、北壁5cmと西・北壁がやや低くなっている。床面は砂利混じりのローム層に掘り込まれており、比較的堅緻な床がみられた。住居内には12本のピットがみられ、この内P1～P4が主柱穴であると思われる。周溝等の施設は確認できなかった。



— 第8図 第75号住居址 —

遺物 (第16図)

土師器甕、黒色土器杯・椀、灰釉陶器椀・壺が出土している。1～4は黒色土器であり、1・2・4は椀、3は杯である。5は灰釉陶器椀である。6は灰釉陶器の壺であるが上半部が欠損しているため正確な器種は特定できないが、長頸壺であろう。7～9は土師器甕で、7は小型甕である。時期：平安時代8期。

第76号住居址

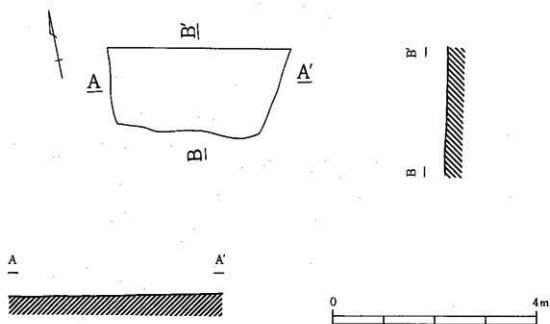
遺構 (第9図)

C-8グリッドに位置している。調査区の北東隅にあたり、北側が調査区外のため完掘することはできなかった。また、上部の削平が著しく壁はすべて消失していた。しかし堅緻な床面が残されていたため、住居址であることは確実である。住居内にはピットおよび周溝等の施設は確認されなかった。

遺物

土師器杯・甕、黒色土器杯がみられたが、どれも小片にすぎず図示することはできなかった。

時期：平安時代。



— 第9図 第76号住居址 —

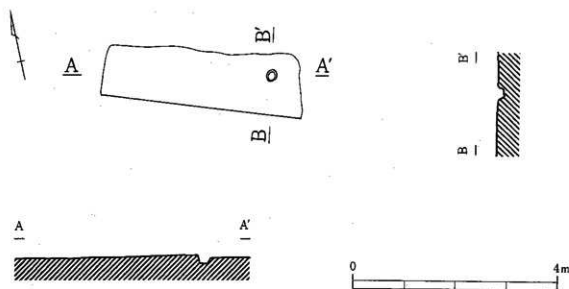
第78号住居址

遺構 (第10図)

A-7・8グリッドに位置している。南側部分は調査区外のため調査できず、また削平のため壁は確認できなかった。よって住居形態、規模等は不明である。しかし、ローム層に掘り込まれた堅緻な床面は残されており、ピットも1本であるが検出された。また、カマド、周溝等の施設は確認することはできなかった。

遺物 (第16図)

図示できたのは10の土師器甕のみである。時期：平安時代。

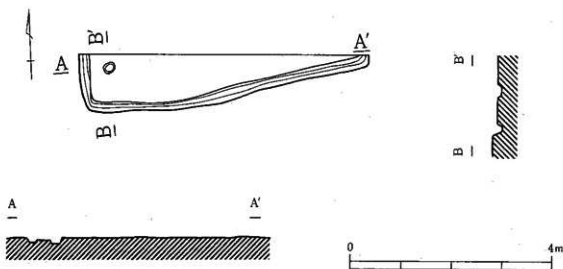


— 第10図 第78号住居址 —

第79号住居址

遺構 (第11図)

C-6・7グリッドに位置している。住居の大部分が調査区外にあるため調査できたのはほんの一部分だけである。しかし幸い東西コーナーは確認できたため、東西の長さは5.7m程度であるということだけは確認できた。壁高は西壁10cm、南壁15cmであった。住居内には1本のビットがみられたが、主柱穴であるかは特定できない。確認できた床面はローム層に掘り込まれた堅緻なものであり、壁際には深さ5cm程度の周溝が廻っていた。カマドは調査区内からは検出されなかった。



— 第11図 第79号住居址 —

遺物 (第16図)

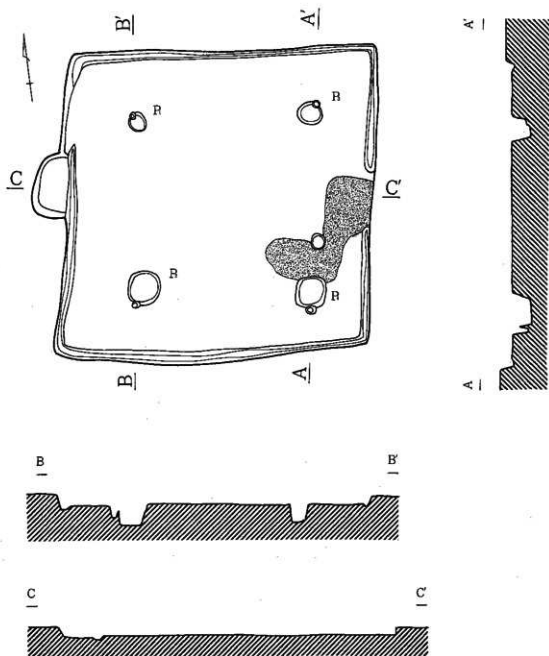
土師器杯・甕・高杯、黒色土器杯が出土している。11は黒色土器杯で、内・外面が丁寧に磨かれている。12～15は土師器で、12は杯、13・14は高杯、15は甕である。杯や高杯には磨きが見られる。

時期：古墳時代。

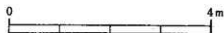
第80号住居址

遺構 (第12図)

B-5・6グリッドに位置している。東西6.0m、南北6.2mの方形を呈する住居である。東側中央には焼土を伴うカマドの痕跡がみられるが、周辺には袖石等は見られない。壁高は、東壁20cm、西壁22cm、南壁21cm、北壁11cmを測り、今回の調査により検出された住居址の中ではもっとも残りの良い



— 第12図 第80号住居址 —



住居址である。また、住居の床はローム層に掘り込まれた平坦で堅緻な床であり、P1～P4が支柱穴であろう。これらの支柱穴には柱を支えたであろうか、すぐ脇にφ15cmほどのピットが併設されている。また、住居の壁際には深さ5～10cmの周溝が廻っている。

遺物 (第16図)

黒色土器杯、須恵器杯・蓋・瓶が出土している。16・17は黒色土器杯である。18～21は須恵器杯で、18・21には高台が付いている。22・23は須恵器蓋である。時期：平安時代4～5期。

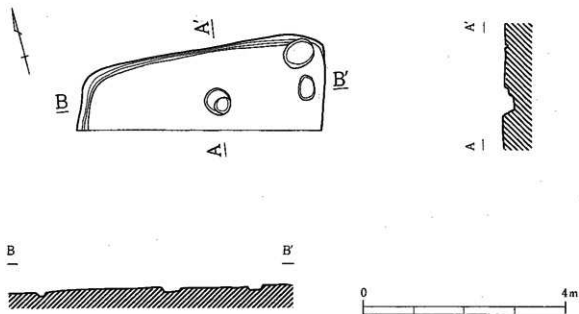
第81号住居址

遺構 (第13図)

A-5グリッドに位置している。遺構の半分以上が調査区外のため完掘できなかったが、東西4.8mの方形ないしは長方形のプランを呈する住居であろう。調査対象の住居部分にはカマド痕跡はみられなかった。また、住居址上部は削平を受けているため壁高は西壁3cm、北壁5cmと非常に浅く、東壁はほぼ平坦であった。ピットは4本確認されたが、支柱穴の特定は困難である。床はロームに掘り込まれ、平坦であったがあまり堅緻なものではなかった。住居西壁および北壁の直下には深さ5cmの周溝が廻っていた。

遺物 (第16図)

遺物量は非常に少なく、24～26の黒色土器が出土している。24は杯である。時期：平安時代7～8期。



— 第13図 第81号住居址 —

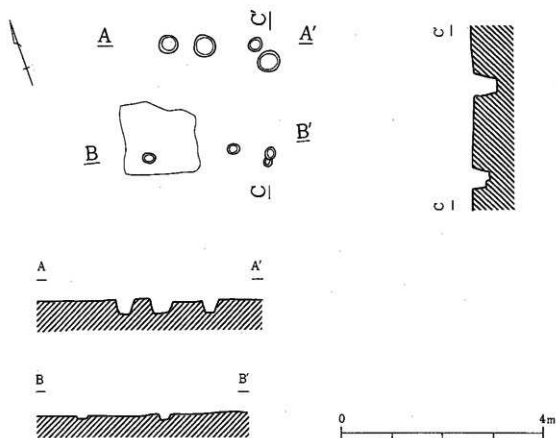
第 82 号住居址

遺 構 (第14図)

A-3グリッドに位置している。この住居も他の住居址同様上部を削平されており、部分的に堅緻な床が残されているが壁はまったく確認できなかったため、住居形態および規模については不明である。堅緻な床の周囲には8本のピットが検出されたが、支柱穴の特定はできなかった。また、カマドの痕跡や周溝等の施設も確認することはできなかった。

遺 物 (第16図)

土師器甕、黒色土器杯、灰釉陶器椀が出土している。27は黒色土器で、28は土師器甕である。時期：平安時代8期。



— 第 14 図 第82号住居址 —

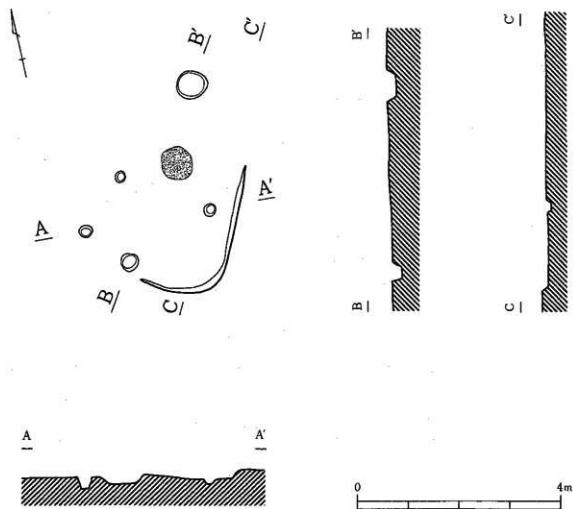
第 83 号住居址

遺 構 (第15図)

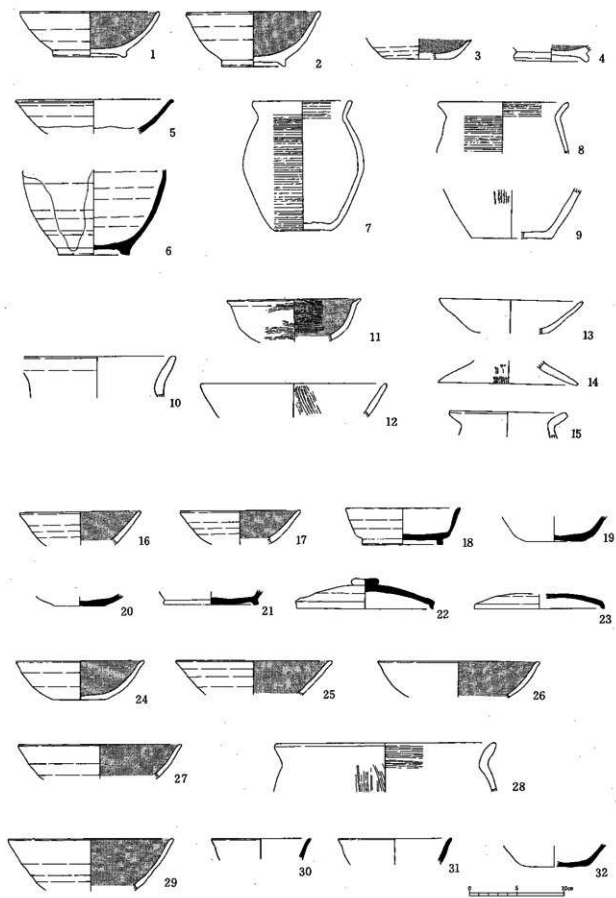
A-3グリッドに位置している。削平および後の時代の土坑等により住居址が著しく破壊され、東南隅の壁の一部が辛うじて残存していた。このため住居址の全容はつかめないが、残存する壁高は、東壁14cm、南壁15cmであった。住居内と思われる箇所には焼土がみられたが、カマドの袖石や粘土といったカマドの構築材は見当らなかった。床はロームに掘り込まれており、焼土周辺には堅緻な床が残されていたが、他の部分には締まりの弱い床がみられた。

遺物 (第16図)

黒色土器、須恵器杯が出土している。29は黒色土器で、30～32は須恵器である。32は須恵器杯である。
時期：平安時代7～8期。



— 第15図 第83号住居址 —



— 第16図 古代の工器 —

3. 中世の遺構と遺物

中世・近世の陶磁器は、すべて土坑からの出土である。総数にして15点あり、7点を図示した。いずれも破片資料で、しかも小片であることが特徴であり、図上で完全に復元できたものは1個体もない。

陶磁器にみる時期は幅広く、焼き物の種類も多種にわたり、一様ではない。時期的には、中世では前半期（13～14世紀）が3点、後半期（15～16世紀）が5点、時期不明が1点、近世の所産としては、初頭期（17世紀前半）が2点、後半期（18世紀後半）以降と想定されるのが4点である。

焼き物の種類では、中世では竜泉窯系青磁1点（碗）・古瀬戸系陶器1点（碗）・東海系埴鉢2点・常滑系陶器4点（甕・壺）・中世陶器不明品1点、大窯期の陶器としては志野の2点、近世後半期以降では磁器碗2点、陶器2点である。

以下、遺構ごとにみていくことにする。

SK-1

遺 構（第17図）

A-3グリッドに位置している。東西1.3m南北1.45mの方形を呈する。深さは約25cmである。

遺 物（第18図）

大窯製品と考えられる志野が出土している。裏面は無釉で、表面には鉄絵が施され、長石釉がかけられる。袋物である。鉄絵は、竹の葉をあしらう。時期的には近世に入る時期であろう。

SK-24

遺 構（第17図）

B・C-3グリッドに位置する。東側が調査区外にあたるため完掘できなかったが、直径2.2mの円形を呈すると考えられる。深さは2.2mと非常に深く、垂直に掘り込まれていた。

遺 物（第18図）

出土量は多く、6点の出土品がある。うち4点を図示した。1と2は東海系埴鉢である。1は、混入させた材料の粒子が大きいため、全体に胎土が粗く、緻密感はない。色調は、やや暗い感じの灰色である。断面をみると、口縁上端部から2cm程下がったあたりを強く圧して薄くつくり出しており、場所により5mmの薄さしかない。これに対し、口縁端部はやや厚みもち、上端部は断面をみると角ばることなく丸みを持たせている。内外面とも灰による自然釉が発色して緑がかった。猿投窯周辺の産地か。時期的には、14世紀初頭期までのものである。

2は、1と異なり胎土は緻密で、見た感じでも粘質感がある。色調は、明るい灰色である。断面は、やはり口縁上端部から下2cmのところを強く押さえており、4mm未満の薄い部分もある。これに対して口縁端部断面をみると6～7mmの厚さを持ち、上端部は角張らせている。中津川窯付近であろう。1に後続時期であり、14世紀初頭期から前葉のものである。

3と4は、常滑系陶器である。3は、甕の口縁部破片である。口縁端部を折り返して縁帯をみせ、断面はいわゆる「N」字状になる。4は、壺の口縁部破片で、端部をやはり折り返すが「N」字状にはなっていない。常滑系としてはこのほかに、図示できなかった壺の頸部破片があり、薄手つくりの製品である。いずれも自然釉の深緑色がところどころ発色しているほかは、鉄分が反応した濃い赤色を呈す。

時的には14世紀前半で押さえられる。

このほかに、図示できなかった陶器が1点ある。瓶かと思われる頸部片で、釉は灰釉である。ロクロを使用して成形する。あるいは、古代の灰釉長頸壺の可能性もある。

SK-30

遺構(第17図)

B-6グリッドに位置する。東西1.3m、南北1.25mの方形を呈する。深さは30cmあり、底部は平坦である。

遺物

近世の陶器が出土する。小片のため詳細は不明。

SK-33

遺構(第17図)

A-6グリッドに位置する。東西0.9m、南北0.45mの楕円形を呈する。深さは30cmである。

遺物

中世に属する常滑系の甕と近世後半期の磁器(碗)が2点出土する。図示はできなかった。常滑系の甕は、SK-24出土の甕より大型の甕で、表面は自然釉がたっぷりとかかる。近世の碗については、小片で詳細は分からないが、それ以降の時期の可能性もある。

SK-38

遺構(第17図)

A-4グリッドに位置する。直径約1.8mと大きく、形状は円形を呈する土坑である。深さは30cmを測る。

遺物(第18図)

古瀬戸系陶器の平碗が出土する。5に図示した。釉調は黄緑色を呈する灰釉で、貫入が細かく入る。胎土もやや黄味を帯びている。15世紀代。

SK-39

遺構(第17図)

A-3グリッドにあり、83号住の内部に位置している。東西0.65m、南北0.55mの楕円形を呈する小さめの土坑である。深さも15cmと浅くなっている。

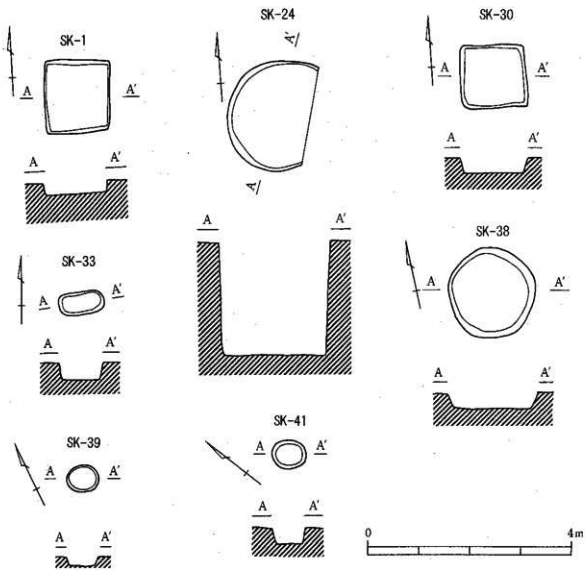
遺物(第18図)

3点が出土した。6の竜泉窯系青磁、7の志野丸皿、近世末期の陶器が各々1点ずつである。青磁碗は、細目の鑄蓮弁文が削出され、青灰色の釉がかかる。胎土は灰色である。14世紀前葉～中葉ともいわれる製品である。志野丸皿は、無地志野で、厚めの長石釉がかかるが、薄いところは赤色が発色している。時的には近世に入るものとも考えたが、もう少し古い可能性もある。いずれにしても青磁碗とは時期は合わない。さらに時期の合わない近世陶器がある。急須の口にあたる部分で、青っぽい釉の中にまだらに緑色が見られる。在地産の陶器であろうか。

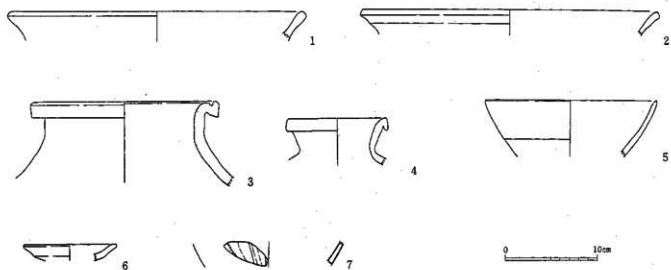
SK-41

遺構(第17図)

A-5グリッドに位置する。東西0.65m、南北0.55mの楕円形を呈している。深さは30cmを測る。



— 第17图 土坑 —



— 第18图中・近世の陶磁器 —

V ま と め

中挾遺跡の中・近世の遺物について

中・近世の遺物に関して、過去2回の中挾遺跡の調査をまとめておく。

昭和61(1986)年調査の国道20号塩尻バイパス用地内で、I区東から検出された建物址の柱穴から銭貨2枚(開元通宝:初鋳621年、聖宋元宝:初鋳1161年)が出土している。しかし、銭貨の性格上、中世の遺構としか言えず、さらに細かい時期は限定できない。

同年調査のII区からは35号住居より内耳鍋の底部破片が出土している。中世後半期の遺物であろう。

平成2(1990)年の調査では、中挾遺跡からは中・近世遺物は見出せなかったが、すぐ西に隣接する五日市場遺跡の発掘調査では、中国産青磁碗(竜泉窯系)が出土している。今回調査のSK-39出土の青磁と同時期で、14世紀半ばのものである。

過去の調査に関して、中世の遺構・遺物は極めて少なく、近世では皆無である。

以上、今回調査分と過去分とを合わせてきたが、まとめると、大きくは4つの時期に分けられそうである。14世紀前半、15世紀代、17世紀前半、江戸時代後半以降である。遺構としては、順に第1期のSK-24、第2期のSK-38・1986年調査の35号住居址、第3期のSK-39・41、第4期のSK-30・33である。以下、簡潔に時期変遷を追う。

第1期:14世紀前半は、調査地内もしくは近隣に居住空間があったと思われる。

第2期:15世紀代も、調査地内もしくは近隣に居住空間があったであろう。

第3期:17世紀前半については、SK-39・41の遺構に該期の遺物を含むが、遺物は混入した可能性もある。従って居住利用の可能性もあるが、居住以外の土地利用が考えられる。

第4期:18世紀以降については、少なくとも調査地内は居住利用された土地ではないと考えられる。

以上の時期には、人々の形跡を何らかの形で感じることができるが、それ以外の時期は、調査区は集落から離れていたのであろう。上記の4時期のうち、17世紀以降、つまり江戸時代以降は居住利用以外を考え、また、遺物が得られなかった4時期以外の時期は、やはり居住利用以外の利用、もしくは土地が利用されない荒地地であったと思われる。

なお、1986年調査の建物址は、その形状から中世前半期の建物の可能性がある。しかも、同一柱穴から複数の銭貨の出土は、地鎮祭の可能性もあり、主屋としての利用であったかも知れない。この遺構については、興味が尽きないが、類推の部分が多い。

VI 結 語

中挾遺跡では過去に2回の発掘調査が実施されています。

昭和61年度に国道20号線バイパス建設工事に伴い行なわれた調査では、縄文時代中期の住居址3軒、弥生時代後期の住居址3軒、方形周溝墓4基、古墳時代の住居址5軒、平安時代の住居址39軒、中世の住居址1軒が検出されました。

平成2年度に土地改良事業に伴い行なわれた調査では、古墳時代から平安時代にかけての23軒の住居址と10棟の建物址が検出されています。今回の調査でも、弥生時代の住居址4軒、古墳時代の住居址1軒、平安時代の住居址6軒が検出されました。

このように中挾遺跡ではこれまで縄文中期3軒、弥生後期7軒、古墳から平安74軒、中世1軒の住居址とされ、弥生時代から平安時代を主体とした大集落であったことが確認されています。

一方遺跡周辺を見ますと、田川を挟んで西側の左岸台地上には弥生から平安時代にかけて約200軒の住居址が発見されています和手遺跡が対峙しており、中挾遺跡の南西には近接するように弥生から平安時代の住居址が44軒検出された五日市場が位置しています。

時代ごとにみていきますと、縄文時代の遺構および遺物は少なく、縄文時代の生活舞台の中心は遺跡東側に広がる東山山麓一帯にあったと考えられます。

弥生時代には住居址は7軒とあまり多くありませんが、方形周溝墓が4基確認されており、集落と墓域とを考える良い資料となっています。また、発掘調査によるものではないが、今回の調査区の東隣の畑からは弥生後期の壺とともに勾玉1、ガラス・水晶小玉123、管玉42が発見されており、弥生時代玉類の一括資料の希有な例として注目を集めています。

古代には、この地は田川流域に展開していた良田郷に属していると考えられ、和手遺跡、五日市場遺跡とともに良田郷の南端域の中心的集落としてとらえられます。

中世の住居址は1軒と少ないが、土坑などの遺構も確認されており、中・近世の遺構および遺物を再検討する時期にきています。

最後に、今回の発掘調査を実施するにあたり深いご理解とご協力を賜りました。株式会社中部宇佐美ならびに山陽建設株式会社、また地元関係者の方々、関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

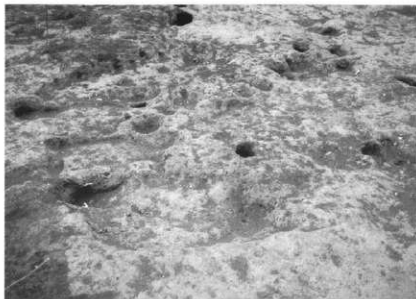
また、発掘調査に際してご尽力いただきました、発掘作業参加者の皆様方にも心より感謝申し上げます。

写真図版

中 挾 遺 跡



中 挾 遺 跡 全 景 (東 从 ち)



77号住居址
(弥生時代)



79号住居址
(古墳時代)



80号住居址
(平安時代)

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかばさみいせき								
書名	中 挾 遺 跡								
副書名	塩尻インター給油所建設工事に伴う緊急発掘調査報告書								
巻次									
シリーズ名									
編著者名	小松 学 野村 一寿								
編集機関	塩尻市教育委員会								
所在地	〒399-0786 長野県塩尻市大門七番町3番3号/TEL 0263-52-0280								
発行年月日	2000年3月24日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
ななかばさみいせき 中 挾 遺 跡	長野県塩尻市大字浅敷	20215	125	36° 6' 51"	137° 58' 18"	1998 11.25~ 1998 12.19	1,590㎡	塩尻インター給油所建設工事	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺溝	主な遺物		特記事項			
中 挾 遺 跡	集落址	弥生時代	堅穴住居址	3軒	弥生土器 打製石斧・磨製石斧 石鏃		弥生集落の広がりを確認することができた。		
		古墳時代	堅穴住居址	1軒	土師器・須恵器		古代の集落の広がりを把握することができた。		
		平安時代	堅穴住居址 土坑	7軒	土師器・黒色土器 須恵器・灰釉陶器				
		中 世	土坑		青磁・古瀬戸・常滑		土坑の検出により、付近に中世の住居空間が存在していた可能性が強くなった。		

中 挾 遺 跡

平成12年3月20日印刷

平成12年3月24日発行

発行：塩尻市教育委員会

